

様式1

令和3年度 学校評価表

学校教育目標	確かな学力を身に付け、心豊かにたくましく、ともに学ぶ児童の育成 ～チーム・感謝・挨拶～		
a ミッションミッション ＜久保小学校の存在理由＞	○ 中学校区で取り組む自己肯定感を高める教育の推進	a ビジョン ＜目標とする学校の将来の姿＞	○ 「素直な子」「自ら学ぶ子」を育てる学校 ○ 移転してよかったと実感できる安心・安全な学校 ○ 児童が憧れられる教職員を育成する学校

尾道市立久保小学校

評価計画					自己評価				学校関係者評価			改善計画		
b 中期経営目標 ＜3年後の姿＞	c 短期経営目標 ＜本年度の目標＞	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 度達成	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	k 達成値				イ	ロ	ハ		
確かな学力の育成	「主体的な学び」を促す授業づくりを進め、基礎学力・判断力・表現力の育成を図る。	主体的に学ぶ力の育成	○算数科を中心にほめる授業を実践する。 ○算数的な見方・考え方をほめる。 ○主体的な態度をほめる。	＜7月平均目標値＞ 1年生：90、 2年生：90、 3年生：90、 4年生：80、 5年生：80、 6年生：80 学校合計 510 ＜標準学力調査＞ 全学年平均 1年生：90、6 2年生：72、3 3年生：68、9 4年生：67、3 5年生：63、8 6年生：72、6 ＜主体性に関するアンケート＞ 4段階評価の内、3以上の評価をした児童80%以上	105.2	111.0	105.4	A	・学年末とめテスト（算数科）のクラスの平均が期待平均点を全学年で上回った。基礎学力は定着している児童が多いといえる。 ・標準学力調査の結果では、昨年度より国・算ともに数値が伸びていた。特に算数科では全学年で全国平均を上回ることができた。しかし、四則計算や漢字・言葉の理解を問われる問題でつまづいている児童がいたり、文章題につきまわっている児童が多かった。 ・主体性に関しては、算数科を中心としたほめる授業の継続により、前向きに学習に取り組む児童や、諦めずにやり続ける児童が増えている。児童同士が関わり合いながら学習を進めていく力がまた乏しい。	3			○目標達成に向け、教職員が指標を意識しながら取り組んだことがわかります。ほめて育てる、という方策が適切であったと思われる。中学校にも継続した取組で成果が出るようにしたいと思います。 ○基礎力の定着が、上級学校へ進学した後、思考力の向上につながると思えますので、貴校の取組の成果が見られます。 ○ほめてやる気を育てる方針が徐々に効果を上げています。このまま継続して下さい。	・算数科を中心としたほめる授業というペースを崩さずに全職員が継続する。 ・評価問題や帯タイムの学習内容を工夫し、基礎力・活字力の向上を図る。 ・児童同士の関わり方をスキルのなところから導入して、対話力がつくよう研究を進めていく。
豊かな心と体の育成	生徒指導の三機能を生かした指導を充実し、自己指導能力の育成を図る。	自他を思いやる心の育成	○「久保のこだわり」を実践する。 ※「久保のこだわり」とは、ていねいな言葉遣いについて指標に表したものである。 ・「久保のこだわり」を徹底指導する。 ・アンケートの実施 ・言葉遣い各人の選出	80	89.8	92.4	A	・言葉遣いについては、児童の肯定的評価が92.4%で、前よりも上がっている。言葉遣い各人の「殿堂入り」の認証を行うことで、児童の肯定的評価の維持・向上に貢献することができた。また、今回の課題であった進出児童の固定化についても、改善することができた。 ・また、名前を呼ばれたときに返事ができない児童がいる等、個に応じた指導・支援が必要である。	3			○丁寧な言葉遣いを指導することで心を育成する、という方策が成果をあげたと思える。固定化についての改善が学校全体への広がりが読み取れます。殿堂入りなどの取組が効果があったものと捉えられます。 ○多様性の社会の中で求められる資質だと思えます。継続して、違いを認め自分を大切にさせる教育活動に期待します。 ○小中学生の互いのメッセージの交換はいいですね。メッセージを贈ることで自分の立場を認識する良い機会となっています。	・3学期から、来年度の取組についても視野に入れながら、「久保のこだわり」の項目に、「返事『はいっ』」を追加した。生徒指導部が職員に周知するとともに、学級担任から児童への周知を行った。来年度も年度当初に全体周知し、継続して指導を行う。	
と校もつに学ぶ	小・中学校が同じ場所で学ぶ良さを生かし、自己肯定感・自己有用感の育成を図る。	愛護を通した達成感・自己肯定感の育成	児童・生徒・教職員による「朝の（スマイルアクション）グリーティング（SAG）」の実施	1 80 2 80	44.2	32.9	65.8	C	・今年度、久保中学校の敷地に転校してから、昨年度までのようにできない場面が多くあり、なわとびに繋がる機会があまり作れないという課題が明らかになった。 ・こういった状況の中でも、継続して取り組むことにより少しずつではあるが検定に合格する児童の割合がどの学年でも増えていることがわかった。 ・2で6年生の割合が多くなっているのは、検定を合格した児童が増えたが、次のレベルに挑戦するだけの機会が取れなかったためである。 ・医学年の伸びが素晴らしい。どのように教へばいいかわかる」と「できる」ようになる児童が増えることが明らかとなった。	3			○どの学年も、中間評価よりも伸びています。しかし学校全体でなわとびの取組をしているというほど、している場面を見えない気がします。 ○コロナ禍において、計画通りの活動が難しい状況であったと思いますが、工夫して取り組まれた成果が出ていると感じます。 ○環境の変化にも関わらずこの達成度は立派です。体力づくりも含めて久保小の伝統になりつつあります。継続は力なり。	・体育科の授業だけではなわとびの取組をする機会が少ない（体育館ではできない）ため、学校全体または複数学年で授業以外に取り組めるよう「なわとび大会」（案）等を企画し機会を増やす。
と校もつに学ぶ	小・中学校が同じ場所で学ぶ良さを生かし、自己肯定感・自己有用感の育成を図る。	愛護を通した達成感・自己肯定感の育成	児童・生徒・教職員による「朝の（スマイルアクション）グリーティング（SAG）」の実施	50	44.2	32.9	65.8	C	・児童会役員が「愛護」に係る久保小学校の取組を考え、児童会役員による朝の挨拶運動を開始した。コロナ禍が継続する中、中学校とかわる場が1学期以上に減少し、児童の実感も目標値を下回った。	3			○久保中学校で統一して取り組むことができた。コロナ禍で難しい状況でやむを得ない部分もある。小中で、コロナ禍でもできることを検討して欲しい。 ○学校全体が一つになり目標達成に向けて取り組まれていることがうかがえます。 ○小・中学生の交流の機会が増えれば仲間意識が生まれこれが増えると思えます。	・児童会と生徒会の児童生徒連携を定期的に行うとともにそれぞれの担当者の連携も計画的に実施し、評価・改善していく。 ・コロナ禍でもできる共通行事を計画・実施し、中学生とよりよい関わりができる場を増やす。

【自己評価 評価】
A：100≦（目標達成）
B：80≦（取組達成）＜100
C：60≦（もう少し）＜80
D：（できていない）＜60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。ハ：わからない。